

P-321

当院における火災を想定した机上シミュレーションの現状と課題

福井赤十字病院 看護部（防災担当者会）

なかばやし まさみ
中林 雅美

【はじめに】当院の防災担当者会では、各スタッフが災害発生時に避難行動が取れることを目的に、2年に1回避難訓練をおこなっているが、実際に訓練に参加できる看護師は5名程度であり、経験機会が少ない。そこで、訓練の機会を増やすために平成22年より机上シミュレーション（以下シミュレーション）を取り入れた。

【目的】効果的にシミュレーションを行うための方法を明確にする。
【対象と方法】シミュレーションに割り当てられた7病棟で、日勤スタッフ3～4名が参加。事前説明は行わず、その場で役割を決めシミュレーションを実施した。

【結果】シミュレーションを実施し、リーダーが的確に指示を出した場合は、スムーズに初期消火ができ、避難方法が的確で避難するまでの時間が短い。消火器、散水栓の位置や使用方法を知らないものがある。リーダーになったスタッフの中には、指示を的確に出せないと感じているスタッフが多いことが明らかになった。また、シミュレーションに参加したスタッフから、全体を把握できるようにフローチャートを作成してほしいという意見が聞かれ作成したが、未経験者は活用することができなかった。

【考察】災害発生時に的確に避難行動をとるためには、リーダーが指示を出し、メンバーが全体を把握して避難行動をとることが大切と考える。そのためにフローチャートを作成したが、効果的に活用ができなかった。特に未経験者はどのように行動するか分からないのではないかと考える。フローチャートは全体を把握するのには有効であるが、避難行動が一目で分かるものではない。そこで、リーダーが指示を出した際に各メンバーがどう行動するとよいか分かるアクションカードを作成しフローチャートと併用することで、全体が把握でき、避難行動がとれるのではないかと考える。

P-323

経費削減による波及効果

仙台赤十字病院 事務部 総務企画課

くまざわ なおみ
熊澤奈穂美、深谷 信久、松本 和夫

【はじめに】当院では、経費削減を目標とし様々な業務改善を行ってきた。当課においては、学会出張旅費に着目し取り組んだ結果、様々な成果が得られたのでここに報告する。

【取り組みと成果】今回の取り組みでは、学会出張時飛行機を利用する際は、バック商品の利用を原則とした。導入するには、職員の協力が必要不可欠だったが、出張者は希望の航空便とホテルを選択するだけで手配は当課で行い、出張者の負担を軽減した。診療上時間の制約が多い職員にとっては、好都合でバック利用率は年々増加した。バック商品を推奨し2年が経過したが、過去2年間を比較すると、バック商品利用件数は59.4%増、一回以上バック商品を利用した職員数は70.5%増となった。また、全出張件数は12.2%増となったが、旅費交通費は5.4%増にとどまった。

【結果と考察】当初、経費削減を目的として始めた業務改善だったが、結果として様々な連鎖を生み出した。学会参加職員数が増加し、より多くの職員が研究・研修・交流の機会が増え、診療業務上、個々のレベルアップに繋がった。実際に認定看護師養成実績は、7名と同規模病院中トップで、現在も1名養成中である。学会参加を動機とし新知識を習得する事は、人材育成及び確保に繋がると考える。また、個々のレベルアップは職員間の士気を向上させる為、病院業務の質の向上にも繋がる。経費削減から様々な連鎖が生まれ病院経営で最重要視される人材育成・確保へと波及効果をもたらした。今後も多岐に渡り見直しを図り業務・体質改善に努力していきたい。

P-322

衛生委員会による職場作業環境改善報告

高山赤十字病院 施設課

ひらた ひろみ
平田 広実、大久保恒正、浮田 雅人、和田 泰明、
齋藤 彰、棚橋 忍

高山赤十字病院（以下高山日赤）の衛生委員会は、2006年4月に労働安全衛生法が改正され、メンタルヘルス対策が調査審議事項に追加されたことから2007年7月にメンバーも刷新されて新たに活動を開始した。委員会の主な活動目標は、1. 全職員が心身に健康に働けること、2. 全職員に働きやすい環境を提供すること、である。2. の具現化のために、産業医と衛生管理者が1組となって毎月1度院内の各部署の巡視を施行している。巡視のベアは2組のため、1年で大凡全職場に相当する24箇所の職場を巡視可能である。この巡視の目的は、各部署における職員の心身の健康状態は勿論のこと、照明、騒音、使用劇薬、休憩時間、掃除状態、避難経路、各部署でのカンファレンスの状況など細部に渡ってチェックすることにより、各部署の現時点での問題把握が可能となるように努力している。この巡視結果を毎月開催される委員会にて報告し改善策の方向付けを行った上で、衛生委員会所属の施設設備担当委員が施設課に持ち帰り、改善出来る点は速攻で再調査・改善することとしている。この結果、高山日赤病院内の多くの部署に於いて、既製品やプロフェッショナルな特製品を用いることなく、身近に調達出来る範囲内でより良い改善を果たすことが出来た。このような労働現場の声を直接汲み上げ改善することにより、現場の職員の物理的な愁訴も少しずつ取り除かれることになり、小さな改善を積み重ねることが結果的にメンタルヘルスケアにも繋がって行くと思われる。今回われわれは、衛生委員会が再結成してから4年余りの院内巡視に伴った各職場での物理的な問題点とそれに対する職場作業環境改善のためにロ－コストで行った具体的な活動内容について報告する。

P-324

入院センター稼働の効果

浜松赤十字病院 看護部

こばやし るみ
小林 ルミ、大場 崇子

【1・研究目的】平成22年11月に入院センターを開設し6か月経過した。入院センターで予約入院患者に事前に入院・検査・手術オリエンテーションを実施することで患者にどのような変化があったか、また該当病棟の看護業務がどのように変化したかを調査する。

【2・研究方法】浜松赤十字病院病棟看護師103名にアンケート調査有効回答率91.6%

【3・結果】入院センターで入院オリエンテーションを実施することで、患者・家族の状態入院時の看護業務に変化のあった業務は明らかになった。患者・家族の変化は、患者が検査や手術に納得している・入院中の予定が解り、理解できた。看護業務では、各種書類の扱いや入院時オリエンテーション内の検査・手術オリエンテーションに要する時間・持参薬チェックに要する時間が短縮できた。その結果、病棟看護師は、入院時オリエンテーションに要する時間が削減できたことで、他の患者ケア・看護記録等に有効な時間活用ができていたことが分かった。今回、患者・家族の効果は、看護師のアンケート結果から考察している。

【4・結論】1) 入院センターを開設し、入院オリエンテーション業務を移行したことは、病棟看護師の入院時オリエンテーションに要した時間を削減できた。2) 削減できた時間を他の看護業務に有効利用できた。3) 患者・家族にとっては、有効である。